

テレビをぼーっと見てみると、鈴木宗男の秘書だったムルアカ氏が格闘家になったというニュースをやっていた。ムルアカ氏なんぞ、私の記憶からとうに消えかかっていた人物だが、マスコミというのはいつまでも追いかけるんだね……と感心したりあきれたりしているときに、ふと頭に浮かんだのは「追うのね、ムルアカ」とフレーズだった。牧野修さん、日本SF大賞受賞おめでとうございます。機関銃で撃たれなくてよかったですね……と、なごやかな雰囲気のまま進行していきたいのはやまやまだが、まず最初に謝っておかねばならないことがある。前回と前々回お約束した月亭八天インタビューの後半は、次回にもちこすことになった。ひとえに私の責任である。その理由はいろいろあつて、一言でいうのはたいへん困難だが、そこをむりに一言で要約すると、「めんどくさい」ということになる。なにしろ、いつもはこの雑文を書くのに、だいたい半日から一日ぐらいいしか費やしているのに、前々回のインタビューは、八天さんに添削してもらい、改稿し……という作業も含めて、十日ぐらいかかった。いろいろ忙しくて、十日と半日を天秤に掛け、今回は後者を選択したという次第である。すみません。

さて、去年の話で恐縮だが、年末、下の娘（2歳半）のお遊びサークルのクリスマス会があるから、そこでサンタクロースの役をやれ、という話が（嫁はんから）舞い込んだ。もちろん即座に断った。そんなものをうれしがってやるのは

世間ひろしといえども、武田統括本部長ぐらいのものだ。

しかし、嫁はんはしつこかった。なにしろ、平日の昼間である。そんなときにぶらぶらしている男性は私ぐらいだよ。たしかにそれは正しい。たいがいのお父さんは、会社でばり仕事をしている時間帯である。説得に説得を重ねられ、とうとう私は承諾した。ある交換条件をつけて。

つまり『じゃりん子チエ』ボックス4巻セットを買ってもいいなら、サンタしてもいい』と言ったのである。かくて、私はサンタになった。老人会がイベントをしている部屋の奥で着替え、大きすぎて扉につつかえる袋を背負い、(その部屋の窓の外は小学校の校庭なので)うえの娘の友だちたちに「あつ、田中のおっちゃんや。なんでそんな変なかつこして

るねん！ みんな、来てみ来てみ」と騒がれ、老人会の皆さんに「すんまへんすんまへんちよっと通しとくなはれすんまへん」と言いながら狭い場所を通らせてもらい……といった顛末は省こう。とにかくサンタは無事終わり、私は「じゃりん子チエ」を購入する権利を手中にしたのだ。年末のばたばたばたしてるとき(たしか大晦日)に、私は銀行で大枚をおろし、梅田のDVD店に「じゃりん子チエ」を買いにいった。しかし、目の前にどっかりと並べられた4箱のボックスを見ているうちに、私の決心はぐらついた。なにしろ全部で十万円弱という価格である。手の中には、それだけの現金を所持している。所持してはいるが……十万円……「じゃりん子チエ」ならしよつちゅうテレビで再放送が……それを録画すればタダ……十万円……。結局、私は「どろろ」ボックスを買った(約二万円)。しかし、それでは、気の小さいやつだ、とか、貧乏性だ、とか後ろ指をさされる可能性がある。そこで、私は、「チキチキマシン猛レース」の廉価版千八百円というのを三枚購入した。これで、誰からも後ろ指を

さされる気遣いはなくなった（はず）。

DVDといえば、先日、おなじみ「アベノ橋魔法 商店街」がなんだかすごい賞をとったらしく（詳しくはガイナックスのホームページ参照。あ、ここか）、ちまたではたいへんな話題である。

「ちょっと奥さん聞きはりました？ アベノ橋魔法 商店街がたいへんな賞をもらいましたよ」

「ほんまでっかいな。そらすごいわ。ちょっとちよっと奥さん、アベノ橋魔法 商店街がたいへんな賞やて」

「へー、よろしおましたなあ。ちょっと奥さん、アベノ橋魔法 商店街がたいへんやて」

「そらえらいごっちゃ。ちょっと奥さん、アベノ橋の商店街がたいへんやて」

「えーっ、ちょっとも知らなかった。奥さん奥さん、アベノ橋の商店街で火事やて」

というようなことになっているらしい。おそらく、ガイナックスの懐は「がっぽがっぽだぎゃあ（南利明風に）」と言うことになっているはずである。ありがたいこととおます。ガイナックス一同になりかわりまして、ここで御礼申しあげます。

てなわけで、今回は、この「アベノ橋魔法 商店街」について語りたいと思う。

何？ おまえのようなアニメ音痴の人間がこの傑作アニメについて何かを語ってもよいのか、とな？

よいのだ。ここだけの話だが、私は「アベノカトリック幼稚園」の出身である。これは、阪堺電車（半壊電車ではないよ。チンチン電車である）の「阿倍野斎場前」駅下車、徒歩数分のところにある（あった？）幼稚園だが、すぐ近くにある駄菓子屋で、五円引きをするのが楽しみだった。五円引き

を知らん？ そうかなあ……。安っぽい紙の袋に怪獣とかヒーローのブロマイド写真が入ってるのが、たくさんぶらさげであって、五円払って、一枚引く……。というシステムのやつ。知らんかなあ。写真も粗悪で、白黒写真に着色したと子供の目にも露骨にわかるやつが多くて、そういうのは「着色」と呼んで、我々は馬鹿にしていた。こないだ梅田の某古書店で、一枚 千円という驚愕の価格がついていて心臓がひっくりかえりそうになった。うーん、そんなに高くなるとるのか。しかし、今の目で見ると、そうだった着色物のほうが、なんともレトロな哀愁を誘って、しみじみする。この五円引きブロマイドの次に出てきたのが、例のライダーカードで、あれはブロマイドに比べて、とても小さく、迫力もないし、私は嫌いだった（といいながら、いまだにけっこう持っているのはなぜ？）。CDで再発になったアルバムのジャケットの迫力がLPレコードに及ぶべくもないのと同じである。

えーと……。なんの話だったかな。そうそう、アベノの話である。私は中学・高校とアベノの近くの学校だったので、学校の帰りによくこの界隈をうろついた。定期試験が終わった日はかならず五、六人で商店街にあるボーリング場でボーリングをしたし（生涯最低記録を出したのもこのボーリング場。たしか三十六点）、アポロビルというジョックピングビルがあり、そこには毎日のように放課後入り浸っていた。当時、SFの同人誌を主催していて、その会報をよくこのビルの一階にあった安い印刷屋でコピーしていた。アポロビルにはアポログリーンとアポロローズというふたつの映画館が入っていて、中学、高校の頃、そこでたくさん映画を見た。

「宇宙空母ギャラクティカ」とかいうのは、センサラウンド方式とかいって、宇宙空母が出撃すると場内のあちこちのスピーカーから爆音が聞こえてくる仕組みなのだが、スピーカ

ーのひとつが壊れていて、それがたまたま私が座っていた席のすぐ近くのやつで、「どじおおおおん」とか「ずぼぼぼぼぼおおん」とか爆音がするたびに、そのスピーカーから脳をひっかきまわすようなノイズが私の頭蓋骨をシエイクする。一応、最後まで観たが、死ぬかと思った。そして、映画の最後に「続く」みたいなテロップが出たときには心底むかついたのを覚えている。ジョン・ウェインの遺作「ラスト・シューティスト」とか「カプリコン1」とか……いろんな映画を毎週のように観たなあ。アベノには、「ムゲン」、「トツプシンバル」、「しぶんきゅうふ」というジャズ喫茶があつて、(たぶん)「トツプ・シンバル」はいまでも健在だと思うが、この店は私が生まれてはじめて入ったジャズ喫茶で、高校一年のとき、友だちとふたりで入ったのだが、ふたりでしゃべっている、店主に「静かに聴け」と注意されたのを覚えている。そのときかかっていたレコードは、レニー・トリスターノだった。「ムゲン」は、ピンサロとか風俗店に囲まれた店で、もう潰れてしまったが、高校のとき私は毎日のように入り浸っており、この店はいつ行ってもガラガラで、夏などはそのせいか冷房がききすぎて、震えがくるほど寒かったが、そういう環境で毎回二時間はねばった。私が行ってた当時はボーズのスピーカーで、一度、コルトレーンの「ヴィレッジ・ヴァンガード・アゲイン」をリクエストしたら、フアラオ・サンダーズというテナー吹きが「アリゾナの砂嵐のような」と形容されたえげつないソロを「ギャオーツ、フンギャー、グエエツ」と吹きはじめると、そのときいた客が全員ぞろぞろ帰ってしまったのをすごくよく覚えている。あのころはフュージョンブームのまったただなかで、そんなときにそんなものをリクエストするほうもするほうだ。今の私なら、(たぶん)周囲の状況などを考えて、リクエストするレコードを選ぶと

思うが、あの当時は、私も高校生で、「軟弱なフュージョンなんか聴きやがって、馬鹿め。ファラオの咆哮を聴け！」という感じで、（精神的に）つつぱっていたのだろうな。

ああ、そうそう。「ムゲン」のすぐ向かいにあった雀球の店にもよく行った。雀球、知ってますか？ パチンコと麻雀を合体させたようなゲームである。これは百円払えば三十分近く時間を潰すことができた。ああ、蘇るわが青春……。

というわけで、アベノについて長々と語ってきたが、実は私はこのアニメ「アベノ橋魔法 商店街」を見ていない。こないだ武田さんが、「DVDをやる」と言っていたので、きつと近々見ることができるとは思っていた。よかったよかった。

今回は、月亭八天インタビューの後半を（なるべく）おおくりしたいと思っておりますので、乞うご期待。

（了）